



薬局だより

白庭病院
2017年12月



関節リウマチとは

関節リウマチとは、関節が炎症を起こし、軟骨や骨が破壊されて関節の機能が損なわれ、放っておくと関節が変形してしまう病気です。腫れや激しい痛みを伴い、関節を動かさなくても痛みが生じるのが、他の関節の病気と異なる点です。

手足の関節で起こりやすく、左右の関節で同時に症状が生じやすいことも特徴です。

その他にも発熱や疲れやすい、食欲がないなどの全身症状が生じ、関節の炎症が肺や血管など全身に広がることもあります。

原因

人のからだには、細菌やウイルスなどの外敵からからだを守るしくみ（免疫）があります。このしくみが異常を起こし、関節を守る組織や骨、軟骨を外敵とみなして攻撃し、壊してしまいます。それにより炎症が起こり、関節の腫れや痛みとなって現れてきます。

その炎症が続くと、関節の周囲を取り囲んでいる滑膜が腫れ上がり、さらに炎症が悪化して、骨や軟骨を破壊していきます。

こうした病気は“自己免疫疾患”とよばれ、体質的にかかりやすい人が何らかの原因によって発症すると考えられています。その原因は、まだよくわかっていませんが、細菌やウイルスの感染、過労やストレス、喫煙、出産やけがなどをきっかけに発症することがあります。

30～50歳代の女性に多く発症する

関節リウマチが発症するピーク年齢は30～50歳代で、男性よりも女性の方が多く発症します。（男女比 1：4）

また、60歳以降に発症する方も少なくありません。

主な症状

こんな症状が続いていませんか？

チェックリスト

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> パジャマのボタンが外しにくい | <input type="checkbox"/> ドアノブが回しにくい |
| <input type="checkbox"/> 家の鍵が開けにくい | <input type="checkbox"/> 靴ひもやリボンが結びにくい |
| <input type="checkbox"/> 歯ブラシが持ちにくい | <input type="checkbox"/> ハサミが使いづらい |
| <input type="checkbox"/> コーヒーのふたが開けにくい | <input type="checkbox"/> ホチキスが使いづらい |
| <input type="checkbox"/> テレビのリモコンが押しにくい | <input type="checkbox"/> お箸が上手に使えない |
| <input type="checkbox"/> 朝食を作るとき、動作に違和感を感じる | |

ひとつでもあったら受診を考えましょう。

関節リウマチの薬

抗リウマチ薬（DMARDs）

免疫調節薬：サラゾスルファピリジン（アザルフィジン®EN）、ブシラミン（リマチル®）

免疫抑制薬：メトトレキサート（リウマトレックス®）、タクロリムス（プログラフ®）

抗リウマチ薬は関節リウマチの原因である免疫の異常に作用して、病気の進行を抑える働きがあります。現在の関節リウマチ治療の第一選択薬は抗リウマチ薬です。

効果が出るまでに1か月から半年くらいはかかるため、消炎鎮痛薬を併用することもあります。効果が不十分な場合には複数の抗リウマチ薬を併用したり他の抗リウマチ薬に切り替えたりすることがあります。注意すべき副作用は、免疫調節薬は腎障害（ブシラミン）、皮疹、肝障害、血液障害で、免疫抑制剤では間質性肺炎、骨髄抑制です。

消炎鎮痛剤（NSAIDs）

ジクロフェナクナトリウム（ボルタレン®）、ロキソプロフェン（ロキソニン®）など

消炎鎮痛薬は、関節の腫れや痛みを和らげる働きがあります。速効性がありますが、関節リウマチの炎症を根底から取り除くことはできません。消炎鎮痛薬を継続的に服用する場合、副作用である胃潰瘍や十二指腸潰瘍に十分注意する必要があります。

ステロイド薬

プレドニゾン（プレドニン®）

炎症を抑える作用が強力で、関節の腫れや痛みを和らげる働きがあります。消炎鎮痛薬や抗リウマチ薬を用いても、炎症が十分に抑制できない場合に用いられます。しかし、ステロイドを中止すると治まっていた関節の腫れや痛みが再発するため、一度使用し始めるとなかなか中止できません。ただし、抗リウマチ薬や生物学的製剤の効果が十分にみられたときは、ステロイドを中止することができます。ステロイドには感染症、糖尿病や骨粗鬆症などを引き起こす恐れがあるため、連用する場合には十分な注意が必要です。

生物学的製剤

インフリキシマブ（レミケード®）、エタネルセプト（エンブレル®）、

アダリブマブ（ヒュミラ®）など

炎症を引き起こすサイトカインであるIL-6やTNF- α の働きを妨げ、関節破壊が進行するのを抑えます。この薬は注射（点滴または皮下注射）で投与しますが、その間隔は1週間に2回から2カ月に1回までと様々です。通院回数やライフスタイルに合わせて治療薬を選択することができます。注意すべき副作用は、感染症（肺炎、結核の再燃）などです。

朝のこわばりが30分以上続いたり、
ちょっとした動作でも動かしにくいと感じたら
受診を考えましょう。

